

家庭的要因と性別が大学生の自己肯定感に及ぼす影響

— 親の発言・態度・家族関係に着目して —

The Impact of Familial Factors and Gender on University Students' Self-Esteem

— Focusing on Parental Communication, Attitudes, and Family Relationships —

廣崎 陽 HIROZAKI Akira

(教育学部)

1. 問題と目的

近年、大学生を含む青年期における「自己肯定感」の低下は、教育および心理臨床の分野において重要な課題とされている。この背景には、経済的・社会的不安、学業や就職に伴うストレス、SNSや他者比較の増加など、若者を取り巻くさまざまな環境変化が複合的に影響していると考えられる。自己肯定感の低下は、精神健康、学業意欲、対人関係などに影響を及ぼす要因となりうる。こども家庭庁(2023)の国際比較調査によれば、日本の若者の自己肯定感は依然として諸外国と比して低水準にあると報告されている。

このような社会的背景を踏まえ、自己肯定感の形成要因、とりわけ家庭環境や親子関係の影響に着目した実証的研究が蓄積されてきた。姜・砂川(2022)は、児童期および青年期における親の養育態度と自己肯定感、ならびに時間的展望との関連を調査し、青年期においては親の養育態度と自己肯定感との間に関連があることを示した。特に、両親双方の態度が重要である一方で、母親の受容的な養育態度が自己肯定感の向上に決定的な役割を果たすことが示唆された。また、入江ら(2013)は、大学生を対象に、親子関係が自己肯定感および死生観に与える影響について性別別に検討し、その結果、男子では「適切なしつけ」が、女子では「円滑な親子関係」のみが、自己肯定感の下位因子である「自己有能肯定感」に有意な影響を及ぼすことが明らかとなった。

さらに、廣崎・木俣(2025)は、大学生の自己肯定感に対する家庭的要因の影響を検討し、親からのネガティブ発言(例:「あなたには価値がない」「〇〇はそんなことしなかった」)の頻度が高いほど、「自尊心」や「自己効力感」が有意に低下することを報告した。特に、家族との情緒的結びつきや受容的な養育態度が心理的支えとして機能する一方で、否定的な言動はそれらを損なうリスク因子となることが示唆された。

なお、本研究において対象とする「自己肯定感」は、廣崎・木俣(2025)において高垣(2009)の定義を援用し、「自己有用感」や「自己効力感」だけでは捉えきれない包括的概念として、「自己の否定的側面も含め肯定し、ありのままの自分を受け止め、自分はこの世の中で役に立っている、自分が自分であっても大丈夫、という感覚」として定義し、この定義に基づき、自己肯定感を「自尊心」「自己効力感」「劣等感のなさ」の3因子で構成

されるものと捉えた。

自己肯定感に焦点を当てた研究は多く存在するが、管見では自己肯定感という概念を、自尊感情や有能感、自己効力感といった近接概念を包括した概念として扱い、性別の違いに着目した分析は少なく、大学生を対象に家庭的要因が自己肯定感に及ぼす影響構造が男女で異なるか否かについての検討は十分になされていないといえる。性別は、青年期の心理的発達や自己像の形成において無視できない要因である。郭ら（2018）は、中学2年生を対象に、自己肯定感に及ぼす親や教師、学校生活、友人関係といった関係的要因を検討し、親や親戚との関係に関する因子の中では、男子生徒では「親への信頼」「親との親密さ」「親の学業干渉の少なさ」「親戚との関係の良好さ」が、女子生徒では、「親への信頼」のみが有意に関連することを示した。また、学業への過干渉は、自己肯定感の低下を招くリスク因子であることが示されている。これらの知見は、家庭的要因の影響構造が性別によって異なる可能性を示唆しており、教育的・心理的支援において性差を考慮する必要性を示すものである。

以上のように、家庭的要因と自己肯定感の関係性に性差が存在する可能性が高いにもかかわらず、大学生という発達段階における構造的な違いに焦点を当てた研究は限定的である。特に、親のネガティブ発言や養育態度が男子学生と女子学生にどのように異なる影響を与えているのかを明らかにすることは、性別に応じた心理的支援や家族関係への教育的介入を検討する上で重要な意義を持つと考えられる。

そこで本研究では、大学生を対象に、親子関係（親からのネガティブ発言、家族の親密度）および養育態度（受容・統制・モニタリング）が自己肯定感（自尊心・自己効力感・劣等感の低さ）に与える影響について、性別の違いに注目して検討することを目的とする。具体的には、男女別に相関分析および重回帰分析を行い、各変数が自己肯定感に与える影響の強さや構造における性差を明らかにする。これにより、青年期における性別特有の心理的支援のあり方に関する、より実証的かつ具体的な知見を得られると考えられる。

2. 方法

2.1. 調査協力者

本研究では、東海地方の大学に在籍する大学生162名を対象に質問紙調査を実施した。このうち、研究参加に同意が得られなかった1名を除外し、最終的に161名（男性：46名、女性：115名、その他・性別無回答：0名）を分析対象とした。対象者の平均年齢は19.2歳（SD = 2.25）であり、年齢の回答に欠損があった者は1名のみであった。

なお、本研究で使用したデータは、廣崎・木俣（2025）において収集されたデータセットを二次的に用いたものであり、研究目的を変更して再分析を行ったものである。

2.2. 使用尺度

2.2.1. 統制変数・背景要因

2.2.1.1. 家族構成

「あなたの家族構成について教えてください。一人暮らしの方は帰省先（ご実家）の家族構成をお答えください。（複数回答可）」との設問に対し、「祖父・祖母・父・母・兄・姉・弟・妹・その他（自由記述）」の中から該当するものを選択させた。各選択肢について、選択があった場合は「1」、なかった場合は「0」でコーディングした。

2.2.1.2. 家族の親密度

「あなたと仲のよい家族を教えてください。（複数回答可）」「あなたと仲のよくない家族を教えてください。」という2つの設問を設け、家族内の親密度を測定した。選択肢は上記と同様の9項目で、コーディング方法も同一とした。

2.2.2. 自己肯定感

自己肯定感は、廣崎・木俣（2025）で作成した「自己肯定感尺度」を使用した。本尺度は、久芳・齊藤・小林（2007）によって開発された8項目の尺度を基に、そのうち中学生対象と判断された2項目（「運動ができる」「成績がいい」）を除外した6項目を抽出し、さらに本研究の定義に基づき筆者らが作成したオリジナル5項目を加えた計11項目で構成された尺度を用い、「1. あてはまらない～5. あてはまる」の5件法で回答を求めたものである。オリジナル項目は「ものごとに自信を持って取り組むことができる」「自分は誰かに必要とされていると感じる」「誰かに嫌われていても、自分らしくあってよいと思える」「自分の嫌いなどころも含めて自分だと思える」「人の功績を素直に認めることができる」を設定した。

信頼性を確かめるため因子分析を行った結果、「自尊心」「自己効力感」「劣等感のなさ」の3因子が抽出された。各下位因子の項目例について、「自尊心」は「今の自分が好きだ」、 「自己効力感」は「自分は誰かに必要とされていると感じる」、 「劣等感のなさ」は「誰かに嫌われていても、自分らしくあってよいと思える」等である。

2.2.3. ネガティブ発言

親からのネガティブ発言については、独自に作成した12項目を使用し、「1. なかった～5. 常にあった」の5件法で回答を求めた。内容は以下の6カテゴリーに分類され、それぞれ、「行動への否定」「否定的比較」「人格の否定」「存在の否定」「価値観への否定」「統制的発言」について、「親から直接自分に言われたことがあるか」と「親が自分以外の人について、または自分以外の人に対して言っているのを耳にしたことがあるか」の2通りで12項目を設定した。ネガティブ発言全体は12項目を用いて尺度得点を得た。ネガティ

ブ発言の6つの下位因子はそれぞれ2項目ずつを用いて尺度得点を得た。

2.2.4. 養育態度

親の養育態度は、内海（2013）の青年期養育尺度（Parenting in Adolescence Scale：以下PAS）を使用して測定した。全15項目からなり、「1. 全くあてはまらない～7. 非常によくあてはまる」の7件法で回答を求めた。「PAS」は全15項目を用いて尺度得点を得た。「PAS」の3つの下位因子に関して、「受容」は6項目、「心理的統制」は6項目、「モニタリング」は3項目をそれぞれ用いて尺度得点を得た。「受容」の項目例としては、「親の人生にとってわたしがたいせつだという感じをうける」、「わたしが悲しんでいるときには、げんきづけてくれる」等がある。「心理的統制」の項目例としては、「わたしのすることは、なんでも親の考えどおりにさせようとする」、「わたしが親とちがったもののみかたをすると、あいそが悪くなる」等がある。「モニタリング」の項目例としては、「ふだんの活動について私と話し合う」、「わたしが外出するとき行き先や誰と一緒に知っている」等がある。

2.2.5. 家庭の環境

家庭環境については、杭瀬・三澤（2003）による家族特性評価尺度を用いて測定した。全26項目から構成され、「1. 全くあてはまらない～7. 非常にあてはまる」の7件法で回答を求めた。なお、選択肢については、回答のしやすさを考慮し、原版より変更をしている。「家族特性」全体は、26項目すべてを用いて尺度得点を得た。また、「家族特性」の5つの下位因子については、「円満」は6項目、「情緒的結合」は6項目、「共同活動」は4項目、「規律」は5項目、「自立」は5項目をそれぞれ用いて尺度得点を得た。「円満」の項目例としては、「私の家族は明るい雰囲気を持っている」、「家族とのコミュニケーションがいつも取れる」等がある。情緒的結合の項目例としては、「家族内で必要なときに適切な助言・援助が得られる」、「言葉に出さなくても思いが通じることがある」等がある。共同活動の項目例としては、「家族で外出することがある」、「家族みんなで食事をする」等がある。「規律」の項目例としては、「家事を分担しておこなっている」、「私の家は家庭内でルールがある」等がある。自立の項目例としては、「家族がお互いに束縛し合わない」、「私の家族はお互いに依存しすぎない」等がある。

2.3. データの二次利用と倫理的配慮

本研究におけるすべてのデータは、廣崎・木俣（2025）において収集された原データを、研究目的を変更したうえで再利用したものである。

当該研究では、参加者に対して調査目的、自由意思による参加、匿名性の確保、今後の学術研究への利用可能性を説明し、文書によるインフォームド・コンセントを得た。再利

用に際しては、当初の同意内容の範囲内であることを確認し、個人が特定されない形で倫理的配慮のもと分析を行った。

2.4. 手続き

調査は大学の講義終了後に、調査協力者に対し、調査についての説明資料を配布し、調査概要や倫理的配慮の説明を行った。説明の後、調査に協力する意思があるものに対して Google フォームの回答に協力を求めた。

2.5. 倫理的配慮

研究依頼用紙の1枚目に、1. 学籍番号、氏名等の個人を特定できる情報は収集していないこと、2. 分析前のデータが外部に出ることはないこと、3. 研究に協力しなくとも、回答の途中で協力を辞退されても不利益を被ることはないことを明記し、Google フォームの1問目に設けた同意項目において「研究代表者から十分な説明があった上で調査に同意する。」にチェックを入れられた回答のみを分析に使用するという倫理的配慮を行った。

2.6. 分析ツール

分析には jamovi-2.3.28.0-win64 を使用した。

3. 結果

3.1. 相関分析

「自己肯定感」と「家族特性」、「PAS」、「仲のよい家族」と「仲のよくない家族」、「ネガティブ発言」の各変数との関連を男女別に検討するため各因子、下位因子間の相関分析を行った。(Table 1～Table 3)

3.1.1. 家族特性と自己肯定感の相関分析

「家族特性」と「自己肯定感」との間の相関について、女性においては両者の間に有意な正の相関が認められた ($r = .49, p < .001$)。「家族特性」の下位因子では、女性において「円満」「情緒的結合」「共同活動」「規律」「自立」の全てが「自己肯定感」およびその下位因子「自尊心」「自己効力感」「劣等感のなさ」と有意な正の相関を示していた。

一方、男性においては、「家族特性」と「自己肯定感」の間に有意な相関は認められず、「家族特性」の下位因子「情緒的結合」が「自己肯定感」およびその下位因子「自尊心」「自己効力感」との間、また「規律」と「劣等感のなさ」との間に、それぞれ正の相関が示された ($r = .32, p < .05, r = .29, p < .05, r = .31, p < .05; r = .29, p < .05$)。その他の因子間には有意な相関は認められなかった。

3.1.2. PASと自己肯定感の相関分析

「PAS」と「自己肯定感」との間の相関について、女性においては両者の間に有意な正の相関が認められた ($r = .44, p < .001$)。「PAS」の下位因子では、女性において「自己肯定感」との間に「受容」「モニタリング」は有意な正の相関、「心理的統制」との間には有意な負の相関が認められた ($r = .51, p < .001, r = .30, p < .01; r = -.24, p < .05$)。また自己肯定感の下位因子「自尊心」との間には「受容」「モニタリング」($r = .44, p < .001, r = .26, p < .01$)、「自己効力感」との間には「受容」「モニタリング」($r = .42, p < .001, r = .34, p < .001$)、「劣等感のなさ」との間には「受容」が有意な正の相関、「心理的統制」との間には有意な負の相関を示していた ($r = .40, p < .001, r = -.37, p < .001$)。

一方、男性においては、「PAS」と「自己肯定感」の間に有意な相関は認められず、「PAS」の下位因子「受容」のみが「自己肯定感」との間に正の相関を示していた ($r = .32, p < .05$)。その他の因子間には有意な相関は認められなかった。

3.1.3. 家族の仲の良さと自己肯定感の相関分析

3.1.3.1. 「仲のよい家族」と「自己肯定感」の相関

家族の仲の良さと「自己肯定感」との間の相関について、女性においては「仲のよい家族_母」と「自己肯定感」およびその下位因子「自尊心」「自己効力感」「劣等感のなさ」すべての間に有意な正の相関が確認された ($r = .25, p < .01, r = .25, p < .01, r = .21, p < .05, r = .24, p < .01$)。また、「仲のよい家族の比率」と「自尊心」、「仲のよい家族_兄」と「劣等感のなさ」それぞれの間に有意な正の相関が示された ($r = .21, p < .05, r = .23, p < .05$)。

一方、男性においては、「仲のよい家族_母」と「自己効力感」の間にのみ有意な正の相関が示された ($r = .32, p < .05$)。その他の因子間には有意な相関は確認されなかった。

3.1.3.2. 「仲のよくない家族」と「自己肯定感」の相関

「仲のよくない家族」と「自己肯定感」との間の相関について、女性においては「仲のよくない家族の比率」、「仲のよくない家族_母」と「自己肯定感」およびその下位因子「自尊心」「自己効力感」「劣等感のなさ」すべての間に有意な負の相関が確認された ($r = -.29, p < .01, r = -.22, p < .05, r = -.24, p < .05, r = -.22, p < .05; r = -.25, p < .05, r = -.32, p < .01, r = -.26, p < .05, r = -.27, p < .05$)。

一方、男性においては、「仲のよくない家族_母」と「自己肯定感」の間に有意な正の相関 ($r = .33, p < .05$)、「仲のよくない家族_兄」と「自尊心」との間に有意な負の相関が示された ($r = -.40, p < .05$)。その他の因子間には有意な相関は確認されなかった。

3.1.3.3. ネガティブ発言と自己肯定感の相関分析

家族の間でのネガティブな内容の発言と「自己肯定感」との間の相関について、女性に

においては「ネガティブ発言」と「自己肯定感」の間に有意な負の相関が示された ($r = -0.41$, $p < .001$)。また、「ネガティブ発言」およびその下位因子「行動否定発言」「他者比較否定発言」「人格否定発言」「存在否定発言」「価値観否定発言」「統制的発言」と「自己肯定感」およびその下位因子「自尊心」「自己効力感」「劣等感のなさ」とのすべての間に有意な負の相関が確認された。

一方、男性においては、「ネガティブ発言」と「自己肯定感」の間には有意な相関は確認されず、下位因子において、「行動否定発言」と「自己肯定感」、「存在否定発言」と「自己肯定感」「自己効力感」、「価値観否定発言」と「自尊心」それぞれの間にのみ有意な負の相関が示された ($r = -0.34$, $p < .05$; $r = -0.30$, $p < .05$, $r = -0.31$, $p < .05$; $r = -0.32$, $p < .05$)。その他の因子間には有意な相関は確認されなかった。

3.2. 重回帰分析

家族関係、親の養育態度と自己肯定感との関係をさらに詳しく検討するため、「家族特性」、「PAS」、「仲のよい家族」、「仲のよくない家族」、「ネガティブ発言」とそれぞれの各下位因子を独立変数、「自己肯定感」とその3つの下位因子を従属変数とした重回帰分析を男女別に行った。(Table 4～Table43)

3.2.1. 家族特性を独立変数、自己肯定感を従属変数とした重回帰分析

「家族特性」が、自己肯定感に与える影響を詳細に検討するため、重回帰分析を行った。「家族特性」および、その5つの下位尺度「円満」「情緒的結合」「共同活動」「規律」「自立」を独立変数、「自己肯定感」およびその3つの下位尺度「自尊心」「自己効力感」「劣等感のなさ」を従属変数として、それぞれ男女別に分析を行った。(Table 4～Table11)

「自己肯定感」に対し、女性においては「情緒的結合」と「自立」が有意、または有意傾向の正の効果 ($\beta = .54$, $p < .001$, $\beta = .18$, $p < .10$)、男性においては、「情緒的結合」が有意傾向の正の効果をも有していた ($\beta = .53$, $p < .10$)。

自己肯定感の下位因子については、女性においては、「自尊心」に対し「情緒的結合」と「自立」が有意な正の効果を与え ($\beta = .45$, $p < .001$, $\beta = .21$, $p < .05$)、「自己効力感」に対しては「情緒的結合」と「規律」が有意な正の効果、「円満」が有意傾向の負の効果をも有していた ($\beta = .43$, $p < .01$, $\beta = .32$, $p < .001$; $\beta = -.26$, $p < .10$)。男性においては、「自尊心」に対し「情緒的結合」が有意な正の効果、「円満」が有意傾向の負の効果をも有しており ($\beta = .64$, $p < .05$; $\beta = -.51$, $p < .10$)、「劣等感のなさ」に対し「規律」が有意傾向の正の効果をも有していた ($\beta = .34$, $p < .10$)。その他の因子に有意な影響は見られなかった。

3.2.2. PASを独立変数、自己肯定感を従属変数とした重回帰分析

「PAS」が、自己肯定感に与える影響を詳細に検討するため、重回帰分析を行った。「PAS」および、その3つの下位因子「受容」「心理的統制」「モニタリング」を独立変数、「自己肯定感」およびその3つの下位尺度「自尊心」「自己効力感」「劣等感のなさ」を従属変数として、それぞれ男女別に分析を行った。(Table12~Table19)

「自己肯定感」に対し、男女ともに「受容」が有意な正の効果を有していた ($\beta = .51, p < .001, \beta = .44, p < .05$)。

自己肯定感の下位因子については、女性においては、「受容」が「自尊心」「自己効力感」「劣等感のなさ」にそれぞれ有意な正の効果を与え ($\beta = .49, p < .001, \beta = .37, p < .001, \beta = .40, p < .001$)、一方で「心理的統制」が「劣等感のなさ」に有意な負の効果を有していた ($\beta = -.25, p < .01$)。男性においては唯一「受容」が「自己効力感」に対し有意傾向ではあるが正の効果を有していた ($\beta = .42, p < .05$)。その他の因子に有意な影響は見られなかった。

3.2.3. 母親との仲のよし悪しを独立変数、自己肯定感を従属変数とした重回帰分析

相関分析において男女ともに自己肯定感と有意な相関が示された母との仲のよさと女性において有意であった仲のよい／よくない家族の比率が、自己肯定感に与える影響を詳細に検討するため、重回帰分析を行った。「仲の良い家族の比率」「仲のよい家族_母」を独立変数、「自己肯定感」およびその3つの下位尺度「自尊心」「自己効力感」「劣等感のなさ」を従属変数として、それぞれ男女別に分析を行った。(Table20~Table35)

仲のよい家族に関して、女性においては「仲のよい家族_母」が「自己肯定感」「自尊心」「自己効力感」「劣等感のなさ」に対して有意な正の効果を有していることがわかった ($\beta = .22, p < .05, \beta = .21, p < .05, \beta = .20, p < .05, \beta = .24, p < .01$)。一方、男性においては、「仲のよい家族_母」が「自己効力感」に対してのみ有意な正の効果が確認された ($\beta = .37, p < .05$)。男女ともに「仲のよい家族の比率」においては自己肯定感への影響は確認できなかった。

仲のよくない家族に関して、女性においては「仲のよくない家族の比率」が「自己肯定感」「自尊心」「自己効力感」に対し有意な負の効果、「劣等感のなさ」に対しては有意傾向の負の効果を有していた ($\beta = -.27, p < .01, \beta = -.20, p < .05, \beta = -.23, p < .05; \beta = -.20, p < .10$)。また「仲のよくない家族_母」は「自己肯定感」「自尊心」「自己効力感」「劣等感のなさ」に対して有意な負の効果を有していることがわかった ($\beta = -.23, p < .05, \beta = -.31, p < .001, \beta = -.24, p < .05, \beta = -.25, p < .05$)。一方、男性においては「仲のよくない家族の比率」が「自己肯定感」「自己効力感」に有意な負の効果、「自尊心」に有意傾向の負の効果を有していることがわかった ($\beta = -.35, p < .05, \beta = -.37, p < .05; \beta = -.34, p < .10$)。また「仲のよくない家族_母」は「自己肯定感」「自尊心」「自己効力

感」に対し有意な正の効果をもっていることが確認された ($\beta = .48, p < .01, \beta = .41, p < .05, \beta = .47, p < .01$)。その他の因子に関しては有意な影響は確認できなかった。

3.2.4. 「ネガティブ発言」の各下位因子を独立変数、自己肯定感を従属変数とした重回帰分析
ネガティブ発言が、自己肯定感に与える影響を詳細に検討するため、重回帰分析を行った。「ネガティブ発言」の下位尺度「行動否定発言」「他者比較否定発言」「人格否定発言」「存在否定発言」「価値観否定発言」「統制的発言」を独立変数、「自己肯定感」およびその3つの下位尺度「自尊心」「自己効力感」「劣等感のなさ」を従属変数として、それぞれ男女別に分析を行った。(Table36～Table43)

女性においては、「行動否定発言」「存在否定発言」が「自己肯定感」に対し有意傾向の負の効果、また、「存在否定発言」は「自尊心」に対しても有意な負の効果をもっていた ($\beta = -.28, p < .10, \beta = -.30, p < .10, \beta = -.49, p < .001$)。また「統制的発言」が「劣等感のなさ」に対し有意な負の効果をもっており ($\beta = -.35, p < .001$)、「人格否定発言」は「劣等感のなさ」に有意な正の効果も確認された ($\beta = .34, p < .05$)。一方で、男性においては、「存在否定発言」が「自己肯定感」に対し、「価値観否定発言」が「自尊心」に対して、また「行動否定発言」が「自己効力感」に対してそれぞれ有意傾向の負の効果をもっていた ($\beta = -.48, p < .10; \beta = -.42, p < .10; \beta = -.48, p < .10$)。また、「価値観否定発言」が「劣等感のなさ」に有意な負の効果、「統制的発言」は「劣等感のなさ」に対して有意な正の効果をもっていた ($\beta = -.45, p < .05, \beta = .58, p < .01$)。

Table 1 家族特性及びPASの各下位因子と自己肯定感及びその下位因子との相関分析

男別 女性：右上、男性：左下
相関行列

	自己肯定感	自尊心	自己効力感	劣等感のなさ	家族特性	家族特性_円満性	家族特性_情緒的結合	家族特性_共同活動	家族特性_規律性	家族特性_自立性	PAS	PAS_受容	PAS_心理的統制	PAS_モニタリング
自己肯定感	—	.88 ***	.86 ***	.68 ***	.49 ***	.35 ***	.55 ***	.30 **	.41 ***	.42 ***	.44 ***	.51 ***	-.24 *	.30 ***
自尊心	.88 ***	—	.68 ***	.45 ***	.42 ***	.30 **	.47 ***	.21 *	.34 ***	.39 ***	.34 ***	.44 ***	-.14	.26 **
自己効力感	.82 ***	.59 ***	—	.42 ***	.41 ***	.25 **	.45 ***	.24 **	.42 ***	.34 ***	.38 ***	.42 ***	-.15	.34 ***
劣等感のなさ	.60 ***	.42 **	.31 *	—	.42 ***	.36 ***	.42 ***	.30 **	.27 **	.33 ***	.40 ***	.40 ***	-.37 ***	.17
家族特性	.24	.18	.28	.09	—	.90 ***	.91 ***	.83 ***	.78 ***	.64 ***	.66 ***	.69 ***	-.31 **	.57 ***
家族特性_円満性	.16	.11	.24	-.03	.91 ***	—	.78 ***	.74 ***	.59 ***	.43 ***	.66 ***	.64 ***	-.33 ***	.56 ***
家族特性_情緒的結合	.32 *	.29 *	.31 *	.05	.91 ***	.76 ***	—	.64 ***	.64 ***	.56 ***	.67 ***	.73 ***	-.30 **	.54 ***
家族特性_共同活動	.15	.08	.15	.11	.82 ***	.72 ***	.64 ***	—	.66 ***	.36 ***	.48 ***	.44 ***	-.19 *	.49 ***
家族特性_規律性	.26	.14	.29	.29 *	.64 ***	.40 **	.61 ***	.47 **	—	.33 ***	.38 ***	.47 ***	-.01	.45 ***
家族特性_自立性	.21	.20	.23	.10	.77 ***	.70 ***	.55 ***	.54 ***	.28	—	.43 ***	.42 ***	-.39 ***	.21 *
PAS	.24	.16	.19	.25	.76 ***	.68 ***	.63 ***	.77 ***	.51 ***	.46 **	—	.84 ***	-.67 ***	.79 ***
PAS_受容	.32 *	.24	.25	.27	.76 ***	.64 ***	.73 ***	.68 ***	.51 ***	.50 ***	.87 ***	—	-.34 ***	.63 ***
PAS_心理的統制	-.06	.01	-.15	-.05	-.46 **	-.49 ***	-.24	-.50 ***	-.13	-.35 *	-.56 ***	-.23	—	-.19 *
PAS_モニタリング	.15	.13	.01	.21	.39 **	.28	.39 **	.46 **	.46 **	.12	.68 ***	.66 ***	.15	—

注. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 2 家族と仲の良さと自己肯定感及び下位因子との相関分析

男女別 女性：右上、男性：左下

相関行列

	自己肯定感	自尊心	自己効力感	劣等感のなさ	仲のよい家族の比率	仲のよい家族の父	仲のよい家族の母	仲のよい家族の兄	仲のよい家族の姉	仲のよい家族の兄弟の比率	仲のよくない家族の父	仲のよくない家族の母	仲のよくない家族の兄	仲のよくない家族の姉	仲のよくない家族の兄弟	仲のよくない家族
自己肯定感	—	.88***	.86***	.68***	.16	.16	.25**	.14	.15	-.29**	-.08	-.25*	.09	.04	-.08	.08
自尊心	.88***	—	.68***	.45***	.21*	.16	.25**	.11	.13	-.22*	-.04	-.32**	.11	-.04	-.16	.14
自己効力感	.82***	.59***	—	.42***	.12	.09	.21*	.04	.11	-.24*	-.03	-.26*	.09	.08	.02	-.04
劣等感のなさ	.60***	.42**	.31*	—	.08	.05	.24**	.23*	.15	-.22*	-.01	-.27*	-.05	.07	.05	.14
仲のよい家族の比率	.13	.23	.14	.09	—	.37***	.28**	.24*	.13	.04	-.11	-.02	.00	-.05	-.12	-.03
仲のよい家族の父	.22	.29	.27	.06	.71***	—	.17	.09	.15	-.29**	-.38***	.09	-.03	.09	-.08	.03
仲のよい家族の母	.21	.23	.32*	.07	.62***	.67***	—	.08	.16	-.16	-.02	-.47***	.16	.10	.11	-.02
仲のよい家族の兄	-.01	-.05	.09	-.10	.40**	.06	.22	—	-.03	-.04	.06	-.07	.07	.20	-.06	-.06
仲のよい家族の姉	.04	-.02	-.15	.20	.11	-.18	-.08	.16	-.13	-.13	-.17	.23*	-.16	.06	-.11	.02
仲のよくない家族の比率	.16	.12	.08	.27	.03	.17	.00	-.08	-.23*	-.23*	-.14	-.12	.04	-.09	-.10	.17
仲のよくない家族の父	-.13	-.15	-.16	-.06	-.41*	-.44**	-.45**	-.31	-.33*	—	.54***	.07	.23*	.16	.11	.08
仲のよくない家族の母	-.17	-.11	-.21	-.14	-.46**	-.59***	-.54***	-.20	-.26	.67***	—	-.03	-.07	.04	.00	.00
仲のよくない家族の兄	.33*	.26	.30	.20	-.19	-.21	-.30	-.07	-.09	.45**	.35*	—	-.07	-.05	-.05	-.05
仲のよくない家族の姉	-.22	-.40*	.02	-.01	-.11	-.06	.13	-.10	-.13	-.23	-.11	-.04	—	.18	-.06	-.06
仲のよくない家族の兄弟	-.02	.07	-.23	-.05	-.10	-.08	-.22	-.14	-.19	.41*	.06	-.06	-.08	—	-.04	-.04
仲のよくない家族	.03	-.01	.06	-.13	-.26	-.29	-.42**	-.10	-.13	.58***	.50**	.70***	-.05	-.08	—	-.05
仲のよくない家族の兄弟	-.15	-.18	-.18	.05	-.03	-.06	-.15	-.10	.15	.20	-.11	-.04	-.05	-.08	-.08	-.05

注. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 3 ネガティブ発言と自己肯定感及びその下位因子との相関分析

男女別 女性：右上、男性：左下
 男性
 相関行列

	自己肯定感	自尊心	自己効力感	劣等感のなさ	ネガティブ発言	行動否定発言	他者比較否定発言	人格否定発言	存在否定発言	価値観否定発言	統制的発言
自己肯定感	—	.88 ***	.86 ***	.68 ***	-.41 ***	-.40 ***	-.37 ***	-.30 **	-.38 ***	-.34 ***	-.35 ***
自尊心	.88 ***	—	.68 ***	.45 ***	-.33 ***	-.33 ***	-.31 ***	-.25 **	-.36 ***	-.25 **	-.25 **
自己効力感	.82 ***	.59 ***	—	.42 ***	-.29 **	-.31 ***	-.30 ***	-.23 *	-.25 **	-.21 *	-.23 *
劣等感のなさ	.60 ***	.42 **	.31 *	—	-.39 ***	-.34 ***	-.34 ***	-.23 *	-.29 **	-.38 ***	-.45 ***
ネガティブ発言	-.19	-.22	-.28	.04	—	.89 ***	.89 ***	.90 ***	.86 ***	.90 ***	.84 ***
行動否定発言	-.14	-.11	-.34 *	.09	.87 ***	—	.81 ***	.79 ***	.67 ***	.72 ***	.73 ***
他者比較否定発言	-.09	-.21	-.13	.11	.88 ***	.75 ***	—	.77 ***	.68 ***	.74 ***	.70 ***
人格否定発言	-.18	-.17	-.24	-.08	.89 ***	.72 ***	.73 ***	—	.78 ***	.77 ***	.64 ***
存在否定発言	-.30 *	-.29	-.31 *	-.09	.85 ***	.65 ***	.66 ***	.85 ***	—	.82 ***	.63 ***
価値観否定発言	-.27	-.32 *	-.20	-.14	.79 ***	.59 ***	.59 ***	.64 ***	.63 ***	—	.72 ***
統制的発言	-.05	-.07	-.21	.23	.84 ***	.68 ***	.69 ***	.62 ***	.59 ***	.67 ***	—

注. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table4 家族特性の下位因子を独立変数、「自己肯定感」を従属変数とした重回帰分析 女性

モデル係数 - 自己肯定感		
予測変数	標準化推定値	ρ
切片		<.001
家族特性_円満	-.19	.20
家族特性_情緒的結合	.54	<.001
家族特性_共同活動	-.09	.49
家族特性_規律	.17	.14
家族特性_自立	.18	.06

注. † $\rho < .10$, * $\rho < .05$, ** $\rho < .01$, *** $\rho < .001$

Table5 家族特性の下位因子を独立変数、「自尊心」を従属変数とした重回帰分析 女性

モデル係数 - 自尊心		
予測変数	標準化推定値	ρ
切片		0.001
家族特性_円満	-.11	.48
家族特性_情緒的結合	.45	.00
家族特性_共同活動	-.19	.16
家族特性_規律	.16	.17
家族特性_自立	.21	.04

注. † $\rho < .10$, * $\rho < .05$, ** $\rho < .01$, *** $\rho < .001$

Table6 家族特性の下位因子を独立変数、「自己効力感」を従属変数とした重回帰分析 女性

モデル係数 - 自己効力感		
予測変数	標準化推定値	ρ
切片		.01
家族特性_円満	-.26	.09
家族特性_情緒的結合	.43	.01
家族特性_共同活動	-.12	.37
家族特性_規律	.32	.01
家族特性_自立	.16	.11

注. † $\rho < .10$, * $\rho < .05$, ** $\rho < .01$, *** $\rho < .001$

Table7 家族特性の下位因子を独立変数、「劣等感のなさ」を従属変数とした重回帰分析 女性

モデル係数 - 劣等感のなさ		
予測変数	標準化推定値	ρ
切片		<.001
家族特性_円満	.07	.67
家族特性_情緒的結合	.27	.11
家族特性_共同活動	.03	.82
家族特性_規律	-.01	.91
家族特性_自立	.16	.14

注. † $\rho < .10$, * $\rho < .05$, ** $\rho < .01$, *** $\rho < .001$

Table8 家族特性の下位因子を独立変数、「自己肯定感」を従属変数とした重回帰分析 男性

モデル係数 - 自己肯定感		
予測変数	標準化推定値	ρ
切片		<.001
家族特性_円満	-.43	.16
家族特性_情緒的結合	.53	.06
家族特性_共同活動	-.01	.97
家族特性_規律	-.02	.93
家族特性_自立	.22	.34

注. † $\rho < .10$, * $\rho < .05$, ** $\rho < .01$, *** $\rho < .001$

Table9 家族特性の下位因子を独立変数、「自尊心」を従属変数とした重回帰分析 男性

モデル係数 - 自尊心		
予測変数	標準化推定値	ρ
切片		<.001
家族特性_円満	-.51	.10
家族特性_情緒的結合	.64	.02
家族特性_共同活動	-.05	.83
家族特性_規律	-.17	.39
家族特性_自立	.26	.24

注. † $\rho < .10$, * $\rho < .05$, ** $\rho < .01$, *** $\rho < .001$

Table10 家族特性の下位因子を独立変数、「自己効力感」を従属変数とした重回帰分析 男性

モデル係数 - 自己効力感		
予測変数	標準化推定値	ρ
切片		.05
家族特性_円満	-.05	.88
家族特性_情緒的結合	.30	.29
家族特性_共同活動	-.14	.57
家族特性_規律	.10	.62
家族特性_自立	.12	.60

注. † $\rho < .10$, * $\rho < .05$, ** $\rho < .01$, *** $\rho < .001$

Table11 家族特性の下位因子を独立変数、「劣等感のなさ」を従属変数とした重回帰分析 男性

モデル係数 - 劣等感のなさ		
予測変数	標準化推定値	ρ
切片		.01
家族特性_円満	-.41	.18
家族特性_情緒的結合	-.11	.70
家族特性_共同活動	.17	.46
家族特性_規律	.34	.09
家族特性_自立	.27	.24

注. † $\rho < .10$, * $\rho < .05$, ** $\rho < .01$, *** $\rho < .001$

Table12 PASの下位因子を独立変数、「自己肯定感」を従属変数とした重回帰分析 女性

モデル係数 - 自己肯定感

予測変数	標準化推定値	ρ
切片		<.001
PAS_受容	.51	<.001
PAS_心理的統制	-.07	.46
PAS_モニタリング	-.05	.65

注. † ρ < .10, * ρ < .05, ** ρ < .01, *** ρ < .001

Table13 PASの下位因子を独立変数、「自尊心」を従属変数とした重回帰分析 女性

モデル係数 - 自尊心

予測変数	標準化推定値	ρ
切片		<.001
PAS_受容	.49	<.001
PAS_心理的統制	.04	.68
PAS_モニタリング	-.07	.55

注. † ρ < .10, * ρ < .05, ** ρ < .01, *** ρ < .001

Table14 PASの下位因子を独立変数、「自己効力感」を従属変数とした重回帰分析 女性

モデル係数 - 自己効力感

予測変数	標準化推定値	ρ
切片		.00
PAS_受容	.37	.00
PAS_心理的統制	.01	.94
PAS_モニタリング	.09	.42

注. † ρ < .10, * ρ < .05, ** ρ < .01, *** ρ < .001

Table15 PASの下位因子を独立変数、「劣等感のなさ」を従属変数とした重回帰分析 女性

モデル係数 - 劣等感のなさ

予測変数	標準化推定値	ρ
切片		<.001
PAS_受容	.40	<.001
PAS_心理的統制	-.25	.01
PAS_モニタリング	-.13	.24

注. † ρ < .10, * ρ < .05, ** ρ < .01, *** ρ < .001

Table16 PASの下位因子を独立変数、「自己肯定感」を従属変数とした重回帰分析 男性

モデル係数 - 自己肯定感

予測変数	標準化推定値	ρ
切片		<.001
PAS_受容	.44	.05
PAS_心理的統制	.07	.69
PAS_モニタリング	-.15	.47

注. † ρ < .10, * ρ < .05, ** ρ < .01, *** ρ < .001

Table17 PASの下位因子を独立変数、「自尊心」を従属変数とした重回帰分析 男性

モデル係数 - 自尊心

予測変数	標準化推定値	ρ
切片		<.001
PAS_受容	.32	.15
PAS_心理的統制	.09	.59
PAS_モニタリング	-.09	.67

注. † ρ < .10, * ρ < .05, ** ρ < .01, *** ρ < .001

Table18 PASの下位因子を独立変数、「自己効力感」を従属変数とした重回帰分析 男性

モデル係数 - 自己効力感

予測変数	標準化推定値	ρ
切片		.00
PAS_受容	.42	.06
PAS_心理的統制	-.01	.94
PAS_モニタリング	-.27	.21

注. † ρ < .10, * ρ < .05, ** ρ < .01, *** ρ < .001

Table19 PASの下位因子を独立変数、「劣等感のなさ」を従属変数とした重回帰分析 男性

モデル係数 - 劣等感のなさ

予測変数	標準化推定値	ρ
切片		<.001
PAS_受容	.22	.32
PAS_心理的統制	-.01	.93
PAS_モニタリング	.07	.76

注. † ρ < .10, * ρ < .05, ** ρ < .01, *** ρ < .001

Table20 「仲のよい家族の比率」、「仲のよい家族_母」を独立変数、「自己肯定感」を従属変数とした重回帰分析 女性

モデル係数 - 自己肯定感

予測変数	標準化推定値	<i>p</i>
切片		<.001
仲のよい家族の比率	.10	.30
仲のよい家族_母	.22	.02

注. †*p* < .10, **p* < .05, ***p* < .01, ****p* < .001

Table21 「仲のよい家族の比率」、「仲のよい家族_母」を独立変数、「自尊心」を従属変数とした重回帰分析 女性

モデル係数 - 自尊心

予測変数	標準化推定値	<i>p</i>
切片		<.001
仲のよい家族の比率	.15	.13
仲のよい家族_母	.21	.03

注. †*p* < .10, **p* < .05, ***p* < .01, ****p* < .001

Table22 「仲のよい家族の比率」、「仲のよい家族_母」を独立変数、「自己効力感」を従属変数とした重回帰分析 女性

モデル係数 - 自己効力感

予測変数	標準化推定値	<i>p</i>
切片		<.001
仲のよい家族の比率	.06	.54
仲のよい家族_母	.20	.04

注. †*p* < .10, **p* < .05, ***p* < .01, ****p* < .001

Table23 「仲のよい家族の比率」、「仲のよい家族_母」を独立変数、「劣等感のなさ」を従属変数とした重回帰分析 女性

モデル係数 - 劣等感のなさ

予測変数	標準化推定値	<i>p</i>
切片		<.001
仲のよい家族の比率	.01	.90
仲のよい家族_母	.24	.01

注. †*p* < .10, **p* < .05, ***p* < .01, ****p* < .001

Table24 「仲のよい家族の比率」、「仲のよい家族_母」を独立変数、「自己肯定感」を従属変数とした重回帰分析 男性

モデル係数 - 自己肯定感

予測変数	標準化推定値	<i>p</i>
切片		<.001
仲のよい家族の比率	.01	.98
仲のよい家族_母	.20	.29

注. †*p* < .10, **p* < .05, ***p* < .01, ****p* < .001

Table25 「仲のよい家族の比率」、「仲のよい家族_母」を独立変数、「自尊心」を従属変数とした重回帰分析 男性

モデル係数 - 自尊心

予測変数	標準化推定値	<i>p</i>
切片		<.001
仲のよい家族の比率	.14	.47
仲のよい家族_母	.15	.45

注. †*p* < .10, **p* < .05, ***p* < .01, ****p* < .001

Table26 「仲のよい家族の比率」、「仲のよい家族_母」を独立変数、「自己効力感」を従属変数とした重回帰分析 男性

モデル係数 - 自己効力感

予測変数	標準化推定値	<i>p</i>
切片		<.001
仲のよい家族の比率	-.09	.63
仲のよい家族_母	.37	.05

注. †*p* < .10, **p* < .05, ***p* < .01, ****p* < .001

Table27 「仲のよい家族の比率」、「仲のよい家族_母」を独立変数、「劣等感のなさ」を従属変数とした重回帰分析 男性

モデル係数 - 劣等感のなさ

予測変数	標準化推定値	<i>p</i>
切片		<.001
仲のよい家族の比率	.07	.70
仲のよい家族_母	.02	.91

注. †*p* < .10, **p* < .05, ***p* < .01, ****p* < .001

Table28 「仲のよくない家族の比率」、「仲のよくない家族_母」を独立変数、「自己肯定感」を従属変数とした重回帰分析 女性

モデル係数 - 自己肯定感

予測変数	標準化推定値	p
切片		<.001
仲のよくない家族の比率	-.27	.01
仲のよくない家族_母	-.23	.03

注. † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table29 「仲のよくない家族の比率」、「仲のよくない家族_母」を独立変数、「自尊心」を従属変数とした重回帰分析 女性

モデル係数 - 自尊心

予測変数	標準化推定値	p
切片		<.001
仲のよくない家族の比率	-.20	.05
仲のよくない家族_母	-.31	.00

注. † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table30 「仲のよくない家族の比率」、「仲のよくない家族_母」を独立変数、「自己効力感」を従属変数とした重回帰分析 女性

モデル係数 - 自己効力感

予測変数	標準化推定値	p
切片		<.001
仲のよくない家族の比率	-.23	.03
仲のよくない家族_母	-.24	.02

注. † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table31 「仲のよくない家族の比率」、「仲のよくない家族_母」を独立変数、「劣等感のなさ」を従属変数とした重回帰分析 女性

モデル係数 - 劣等感のなさ

予測変数	標準化推定値	p
切片		<.001
仲のよくない家族の比率	-.20	.06
仲のよくない家族_母	-.25	.02

注. † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table32 「仲のよくない家族の比率」、「仲のよくない家族_母」を独立変数、「自己肯定感」を従属変数とした重回帰分析 男性

モデル係数 - 自己肯定感

予測変数	標準化推定値	p
切片		<.001
仲のよくない家族の比率	-.35	.05
仲のよくない家族_母	.48	.01

注. † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table33 「仲のよくない家族の比率」、「仲のよくない家族_母」を独立変数、「自尊心」を従属変数とした重回帰分析 男性

モデル係数 - 自尊心

予測変数	標準化推定値	p
切片		<.001
仲のよくない家族の比率	-.34	.06
仲のよくない家族_母	.41	.02

注. † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table34 「仲のよくない家族の比率」、「仲のよくない家族_母」を独立変数、「自己効力感」を従属変数とした重回帰分析 男性

モデル係数 - 自己効力感

予測変数	標準化推定値	p
切片		<.001
仲のよくない家族の比率	-.37	.03
仲のよくない家族_母	.47	.01

注. † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table35 「仲のよくない家族の比率」、「仲のよくない家族_母」を独立変数、「劣等感のなさ」を従属変数とした重回帰分析 男性

モデル係数 - 劣等感のなさ

予測変数	標準化推定値	p
切片		<.001
仲のよくない家族の比率	-.18	.32
仲のよくない家族_母	.29	.12

注. † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table36 「ネガティブ発言」の各下位
因子を独立変数、「自己肯定感」を従属
変数とした重回帰分析 女性

モデル係数 - 自己肯定感		
予測変数	標準化推定値	p
切片		<.001
行動否定発言	-0.28	0.10
他者比較否定発言	-0.12	0.46
人格否定発言	0.25	0.16
存在否定発言	-0.30	0.07
価値観否定発言	0.06	0.73
統制的発言	-0.08	0.56

注. †p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

Table37 「ネガティブ発言」の各下位
因子を独立変数、「自尊心」を従属変数
とした重回帰分析 女性

モデル係数 - 自尊心		
予測変数	標準化推定値	p
切片		<.001
行動否定発言	-.28	.12
他者比較否定発言	-.15	.39
人格否定発言	.27	.13
存在否定発言	-.49	.00
価値観否定発言	.23	.21
統制的発言	.03	.86

注. †p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

Table38 「ネガティブ発言」の各下位
因子を独立変数、「自己効力感」を従属
変数とした重回帰分析 女性

モデル係数 - 自己効力感		
予測変数	標準化推定値	p
切片		<.001
行動否定発言	-.26	.15
他者比較否定発言	-.22	.21
人格否定発言	.18	.33
存在否定発言	-.22	.21
価値観否定発言	.18	.34
統制的発言	.00	.99

注. †p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

Table39 「ネガティブ発言」の各下位
因子を独立変数、「劣等感のなさ」を従
属変数とした重回帰分析 女性

モデル係数 - 劣等感のなさ		
予測変数	標準化推定値	p
切片		<.001
行動否定発言	-.09	.61
他者比較否定発言	-.12	.45
人格否定発言	.34	.05
存在否定発言	.00	.99
価値観否定発言	-.24	.16
統制的発言	-.35	.01

注. †p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

Table40 「ネガティブ発言」の各下位
因子を独立変数、「自己肯定感」を従属
変数とした重回帰分析 男性

モデル係数 - 自己肯定感		
予測変数	標準化推定値	p
切片		<.001
行動否定発言	-0.10	0.70
他者比較否定発言	0.11	0.66
人格否定発言	0.24	0.46
存在否定発言	-0.48	0.10
価値観否定発言	-0.33	0.13
統制的発言	0.30	0.21

注. †p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

Table41 「ネガティブ発言」の各下位
因子を独立変数、「自尊心」を従属変数
とした重回帰分析 男性

モデル係数 - 自尊心		
予測変数	標準化推定値	p
切片		<.001
行動否定発言	.12	.61
他者比較否定発言	-.28	.27
人格否定発言	.38	.23
存在否定発言	-.45	.12
価値観否定発言	-.42	.06
統制的発言	.35	.14

注. †p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

Table42 「ネガティブ発言」の各下位
因子を独立変数、「自己効力感」を従属
変数とした重回帰分析 男性

モデル係数 - 自己効力感		
予測変数	標準化推定値	p
切片		<.001
行動否定発言	-.48	.06
他者比較否定発言	.36	.16
人格否定発言	.15	.64
存在否定発言	-.37	.20
価値観否定発言	-.01	.96
統制的発言	-.01	.98

注. †p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

Table43 「ネガティブ発言」の各下位
因子を独立変数、「劣等感のなさ」を従
属変数とした重回帰分析 男性

モデル係数 - 劣等感のなさ		
予測変数	標準化推定値	p
切片		<.001
行動否定発言	.08	.73
他者比較否定発言	.15	.55
人格否定発言	-.22	.48
存在否定発言	-.11	.68
価値観否定発言	-.45	.04
統制的発言	-.58	.01

注. †p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

4. 考察

「自己肯定感」と「家族特性」「PAS」「ネガティブ発言」「仲のよい家族」と「仲のよくない家族」の各変数との関連を男女別に検討するため各因子、下位因子間の相関分析、重回帰分析を行った結果、自己肯定感に与える影響が男女で異なることがわかった。

4.1. 家族特性が自己肯定感に与える影響の男女差

「家族特性」と「自己肯定感」との間の相関について、女性においては「円満」「情緒的結合」「共同活動」「規律」「自立」のすべてが「自己肯定感」およびその下位因子「自尊心」「自己効力感」「劣等感のなさ」と有意な正の相関を示していた。一方、男性においては、「情緒的結合」と「自己肯定感」「自尊心」「自己効力感」、「規律」と「劣等感のなさ」との間に正の相関が認められた。

これは、女性にとって家庭が自己肯定感の全体的な基盤となり、家庭の雰囲気よさ、感情的な支え合い、自主性の尊重など温かく支持的な環境が自己評価の高さに結びつくことを示唆する。一方、男性では、感情的なつながりが自己を認める力や自信に関連し、加えて家庭内の規律が他者評価への過敏さを抑え、自分らしさの維持に資する可能性が示された。

次に、重回帰分析の結果、男女ともに「情緒的結合」が「自己肯定感」と「自尊心」にポジティブな影響を与えていた。女性では、加えて「情緒的結合」が「自己効力感」に、「自立」が「自己肯定感」と「自尊心」に、「規律」が「自己効力感」にポジティブな影響を与え、「円満」が「自己効力感」にネガティブな影響を与える可能性を示していた。男性では「規律」が「劣等感のなさ」にポジティブな影響を及ぼす傾向がある一方、「円満」が「自尊心」にネガティブな影響を及ぼす可能性が示唆された。

以上の結果から、情緒的に受け入れられている実感が自己肯定感や自尊心を高めることが性別を問わず示されたといえる。女性では、自分の考えや意見が尊重される感覚が自己評価と自己効力感の基盤となり、適切なしつけや生活の秩序は「自分ができる」という実感の形成に結びつくことがわかった。他方、男性では、明確なルールやしつけが劣等感の低減に寄与し、「何が正しいか」「どこまでやればよいか」の見通しが自信の拠り所となる可能性が示された。

もっとも、家庭が円満であるほど男性では自尊心が、女性では自己効力感がそれぞれ低下するという結果は、一般的な「良好な家族関係」が常に肯定的影響を及ぼすという見方と異なるものであった。男性では、自立に向かう時期に、過干渉的、あるいは波風の立たない関わりが自己主張、そして葛藤の経験を乏しくさせ、自己内評価の相対的な低下につながっている可能性がある。女性でも、衝突の少ない穏やかな環境は挑戦や困難の克服経験を削がれ、自分でやり遂げられる感覚の形成を阻むことが考えられる。なお、本研究の男性サンプルは46名と少数であるため、これらの解釈には慎重さが求められる。

4.2. 親の養育態度が自己肯定感に与える影響の男女差

「PAS」と「自己肯定感」との間の相関について、女性においては「受容」と「自己肯定感」「自尊心」「自己効力感」「劣等感のなさ」との間、「モニタリング」と「自己肯定感」「自尊心」「自己効力感」との間にそれぞれ正の相関、「心理的統制」と「自己肯定感」「劣等感のなさ」の間に負の相関が確認された。一方、男性においては、「受容」のみが「自己肯定感」との間に正の相関を示していた。

次に、以上のことを踏まえ、親の養育態度が、自己肯定感に与える影響を詳細に検討するため、重回帰分析を行った結果、男女ともに「受容」が「自己肯定感」にポジティブな影響を与えており、女性においては、「受容」が「自尊心」「自己効力感」「劣等感のなさ」にそれぞれポジティブな影響を与える一方で、「心理的統制」が「劣等感のなさ」にネガティブな効果を有していた。男性においては唯一「受容」が「自己効力感」に対しポジティブな影響を与えていることがわかった。

以上の結果から、女性は、肯定的に受け入れられることで、自身に対する肯定感や自分には価値があるという感覚、他者との比較で劣等感を抱かず、有能感が生まれやすいことや、適切な見守りがあることで、親からの関心や信頼を感じ、自信を持ちやすくなる可能性があるといえる。一方で、感情的コントロールや過干渉は、自分らしさや自由な自己表現の否定につながり、自分を肯定的に感じるができなくなるといったことが示された。

また男性においては、親から存在をそのまま受け入れてもらうことが自己肯定感に対し最も重要な影響要因となっている可能性が示された。

4.3. 家族との仲の良さが自己肯定感に与える影響の男女差

4.3.1. 「仲の良い家族」が自己肯定感に与える影響の男女差

家族の仲の良さと「自己肯定感」との間の相関について、女性においては「仲のよい家族_母」と「自己肯定感」およびその下位因子すべての間に有意な正の相関が確認され、「仲のよい家族の比率」と「自尊心」「仲のよい家族_兄」と「劣等感のなさ」それぞれの間に有意な正の相関が示された。一方、男性においては、「仲のよい家族_母」と「自己効力感」の間にのみ有意な正の相関が示された。

次に、以上のことを踏まえ、家族の仲の良さが自己肯定感に与える影響を詳細に検討するため、重回帰分析を行った結果、女性においては「仲のよい家族_母」が「自己肯定感」及びその下位因子すべてに対して有意な正の効果を持っており、一方、男性においては、「仲のよい家族_母」は「自己効力感」に対してのみ有意な正の効果を確認された。

以上の結果から、女性においては、母親との関係は情緒的支え・共感的理解・安心感の源として機能しやすく、それが自己の肯定的認知を支えているといえる。母親と仲が良いと感じることは、単なる情緒的つながりにとどまらず、母親の自己肯定的態度を内在化す

ることによって、自尊心・自己効力感・劣等感の低減といった多面的な心理的安定を促進する可能性があるといえる。すなわち、母親からの肯定的な関わりが、娘の存在価値や行動への自信につながる可能性が示唆されたといえる。

一方、男性においては、母親との良好な関係が自己効力感に限定して有意な影響を示した。母親の情緒的支援や信頼は、青年期男性の行動に対する自信や有用感を育む要因となっている可能性がある。つまり、母親の受容的関わりは、自尊心の直接的基盤というよりも、「自分にはできる」「誰かの役に立てる」という自身の行動に対する確信の形成を支える心理的要素として機能していると考えられる。

これらの結果は、青年期の自己肯定感が母親との関係に大きく依存していることを示す一方で、男女で影響のパターンが異なる点は、自己像の形成スタイルや情緒的依存の方向性の違いを反映していると考えられる。

4.3.2. 「仲のよくない家族」が「自己肯定感」に与える影響の男女差

「仲のよくない家族」と「自己肯定感」との間の相関について、女性においては「仲のよくない家族の比率」、「仲のよくない家族_母」と「自己肯定感」およびその下位因子すべての間に有意な負の相関が確認された。一方、男性においては、「仲のよくない家族_母」と「自己肯定感」の間に正の相関、「仲のよくない家族_兄」と「自尊心」との間に負の相関が示された。

次に、家族の仲が自己肯定感に与える影響を詳細に検討するため重回帰分析を行った結果、女性では「仲のよくない家族の比率」と「仲のよくない家族_母」が「自己肯定感」とその下位因子すべてにネガティブな影響を与えていた。一方、男性では「仲のよくない家族の比率」が「自己肯定感」「自尊心」「自己効力感」にネガティブな影響を有し、「仲のよくない家族_母」はそれらにポジティブな影響を示した。

これらの結果は、女性において家庭内の不和が心理的安全感や情緒的安定を損ない、自己受容の低下につながる傾向を示すものである。特に母親との関係が悪いほど、信頼や共感といった情緒的支えが得られず、自己肯定感の低下につながると考えられる。

一方、男性において母親との不仲が自己肯定感を高める傾向が見られた。青年期男子にとって、母親との関係は情緒的支援であると同時に心理的自立を達成するための課題ともなるため、一定の対立関係が自己の確立を促す可能性が示されたといえよう。すなわち、表面的な不仲は心理的な自立過程を反映している場合があると考えられる。母親との衝突や距離の取り方を通して、息子は依存から脱却し、主体的な自己を形成していく発達過程を経験すると考えられる。

4.4. ネガティブ発言が自己肯定感に与える影響の男女差

家族の間でのネガティブな発言と「自己肯定感」との相関について、女性では「ネガ

タイプ発言」と「自己肯定感」およびその下位因子すべてに有意な負の相関が認められた。一方、男性では「行動否定発言」と「自己効力感」、「存在否定発言」と「自己肯定感」「自己効力感」、「価値観否定発言」と「自尊心」との間にそれぞれ有意な負の相関が確認された。

次に、家族のネガティブな発言が自己肯定感に与える影響を詳細に検討するため重回帰分析を行った結果、男女ともに「存在否定発言」が「自己肯定感」を低下させる可能性がある一方で、「統制的発言」は「劣等感のなさ」に対して女性ではネガティブに、男性ではポジティブに作用していた。また、女性では「存在否定発言」が「自尊心」に、「人格否定発言」が「劣等感のなさ」にポジティブな影響を及ぼし、男性では「価値観否定発言」が「自尊心」「劣等感のなさ」に、「行動否定発言」が「自己効力感」にそれぞれネガティブな影響を及ぼす可能性を示した。

これらの結果から、男女ともに存在そのものを否定する言葉が自己肯定感を低下させる可能性があることが明らかとなった。これは、吉田（2022）の否定的な言葉が子どもの自尊感情を損なうという指摘や、野澤・浅井（2023）による身内卑下呈示が子どもの自信を奪う可能性に関する知見と整合する結果となった。

性差に着目すると、女性では存在を否定されることが自己存在の根幹を揺るがし、「愛されない自分」「受け入れられない自分」といった否定的自己像を強化することで、自己肯定感を傷つけると考えられる。また、人格に触れる発言については、相関分析では人格否定発言が劣等感を高める方向に作用していたのに対し、重回帰分析では他の発言様式を統制すると、逆に劣等感を和らげる方向の効果がみられた。この逆転は、抑制効果によるものである可能性が高いと考えられ、他の否定的言動と共変している部分を統制すると、残された側面として関係性の持続を前提としたポジティブな部分がプラス方向に作用している可能性がある。つまり、青年期において「自分を見てくれている」「期待されている」といった意味で認知されると、そのことが劣等感の低減に繋がった可能性もある。この結果に関しては発言の意味や受け手の認知、特性等さらなる検討が必要である。

一方、男性では、価値観や行動への否定が自己肯定感を損なうことが示され、信念や判断を否定されることで自信を失いやすいと考えられる。ただし、「統制的発言」が劣等感を和らげる方向に働いた点は特筆に値する。これは、入江ら（2013）が示した「大学生男子の自己有能肯定感を最も高めるのは、親からの適切なしつけである」という知見と一致すると考えられる。内海（2013）の「心理的統制」の項目には、「どんなふうに行動したらよいかを、いつもわたしに言い聞かせる」という項目が含まれており、「統制的な発言」とは単なる支配ではなく、これは行動への方向づけや枠組みを示す側面があると考えられる。そのようにある種「助言」として機能する場合、男性においては有能感や自信の支えとなる可能性があると考えられる。

5. 総合考察

本研究では、家庭的要因（家族特性・養育態度・家族の仲の良さ・ネガティブ発言）が大学生の自己肯定感に与える影響を男女別に検討することが目的であった。その結果、いずれの要因も自己肯定感との関連を有しており、その影響には明確な性差が認められた。

5.1. 家庭環境が男女に及ぼす自己肯定感への影響

まず、女性においては、家庭における「円満さ」「情緒的結合」「自立」など、多面的な家族の温かさや心理的支えが、自己肯定感と概ね強く関連していた。家庭の雰囲気の高さや感情的支援、自主性の尊重など、家庭が温かく支持的であることが、自分自身を肯定的に捉える力につながっているといえる。藤川・大本（2015）は、高校生女子は父母双方から理解されていると感じるほど自己受容や他者受容が高まることを示しており、特に母親から理解されている感覚は男子よりも強く影響することが示唆されている。本研究でも「仲のよい家族_母」が自己肯定感の全下位因子に有意な正の影響を及ぼしており、母親との良好な関係は情緒的支えであると同時に、肯定的な自己認知を媒介する心理的基盤として機能していると考えられる。

一方、男性では、家族との「情緒的結合」や「規律」が自己肯定感と関連しており、家庭に明確なルールや枠組みが存在することが、他者評価に過敏にならず自分らしさを維持する傾向につながっていた。つまり、男性においては、家庭内での役割の明確さや自立を支える適度な距離が、自己効力感や自尊心の形成に寄与しているといえる。これについては、朝日・岡本（2018）が、精神的健康度が高い（GHQ30低群）学生は、親への不満に対して自身で解決策を見出し、親に対し言い返す点が共通しており、これは、健全な葛藤を経て自律性を確立しているため、対人関係において問題を起こさないように配慮しすぎる傾向が低いことを示唆している。つまり、適切な規律や指導のもとでの自律的経験は、精神的強さの形成に寄与し、自己効力感が高まると考えられる。また入江他（2013）は、大学生男子が自らの能力や価値を肯定的に捉える感覚を最も高めるのは、親からの「適切なしつけ」であることを明らかにしている。この「しつけ」には褒めや叱りといった評価・指導の要素が含まれ、統制的な発言がそのように機能することにより、自己効力感が支えられ、劣等感を和らげる可能性が示唆されたといえる。

以上のことから、性別によって家庭に求める心理的役割や自己肯定感の形成プロセス、影響要因が異なる可能性が示された。女性は情緒的な支援、男性は自立を促す支援が自己肯定感を育む上で必要であると考えられ、この差異は、今後の支援や教育的アプローチを考えるうえで重要な視点となるといえる。

5.2. 母親との関係性と自己肯定感の形成

家族の中でも特に母親との関係が自己肯定感に及ぼす影響については、まず母娘関係に

注目すると、橋本・前田（2020）は、母親の自尊心が高いほど娘の自尊心も高い傾向を報告しており、母親との関係を通して肯定的な自己像が内在化される可能性を示している。本研究の女性における母親との仲の良さや自己肯定感のポジティブな関連も、この母娘間の自己像の内在化を支持するものであると考える。

一方、男性においては、母親との良好な関係が「自己効力感」に限定して有意な影響を示した。これは母親の信頼的な態度や期待が青年期男性の「行動的自信」や「対人的有用感」を育むことを示唆している。母親からの受容的関わりは、男性にとっては情緒的支えというよりも、「自分にはできる」「誰かの役に立てる」という感覚の形成に寄与する心理的支えとして機能していると考えられる。

5.3. 家族関係の逆説的機能と心理的自立

本研究では、家族間の「円満さ」が女性においては自己効力感を低下させ、男性においては自尊心を下げるという一見逆説的な結果が得られた。久芳ら（2007）は、青年期の男性において、精神的・物理的自立を望む時期に家族とのかかわりが強いことが、かえって自己肯定感を低下させる可能性を指摘している。家族の過干渉的関与や過度の円満さは、自己主張や葛藤経験の乏しさを招き、自分らしさの実感を損なう要因となると考えられる。

また、女性においても、家庭が穏やかすぎる場合、挑戦や困難を乗り越える機会が少なくなり、自分の力で課題を解決したという経験が得られにくくなるため、自己効力感が育ちにくい可能性がある。朝日・岡本（2018）は、自身の考えを示さないことで問題を起こさないようにするという周囲に配慮した行動の結果、自身のストレスが蓄積する可能性を述べており、親との適度な葛藤や意見表明が、精神的強さと自己効力感の発達に寄与する可能性が考えられる。すなわち、衝突のなさが良好な関係とは限らず、適度な対立や葛藤経験が自己の成長や自立を促す側面があるといえる。

5.4. 統制的関わりとその両義性

心理的統制やネガティブ発言の分析では、男女ともに「存在否定発言」が自己肯定感を低下させる一方で、「統制的発言」は性別によって異なる方向の影響を示した。女性においては「統制的発言」が劣等感を高める傾向を示し、男性においては逆に劣等感を抑制する傾向がみられた。

内海（2013）は、親からの過剰な統制が子どもの適応にとって有害となることを指摘し、吉田（2022）も、養育者の「褒め」や「叱り」が過剰な場合、それを子どもが「干渉」として受け取り、自尊感情の低下を招く可能性を報告している。つまり、親子の「円満さ」が過度に強すぎると、それは精神的自立を阻害する密着型の関係性につながり、過干渉・統制的な養育態度として認識され、子どもの自尊感情や自律性に負の影響を与える

可能性が考えられる。これらの知見は、女性において統制的発言が劣等感の低さに影響を及ぼすという本研究の結果と整合的であり、統制的な関わり方が自己評価の形成に関与する可能性を示唆している。一方、男性では、前述の通り、一定の助言的発言が心理的枠組みとして機能し、入江ら（2013）のいう「適切なしつけ」に類似する支援の統制が、劣等感の低減や自己有能感の維持に寄与している可能性が示された。

5.5. 男女差にみる自己肯定感の脆弱性と家庭的支援の在り方

以上の結果を総合すると、本研究では、家族の関係による男女間での「傷つきやすい自己領域」の差異が示された。

女性においては、「受容」「共感」「理解」といった情緒的支援が自己肯定感を高める中心的要素であり、とくに母親との信頼関係が重要であることが明らかとなった。したがって、家庭や学校においては、本人の感情や意見を丁寧を受け止め、肯定的にフィードバックする姿勢が求められる。

家庭では、親が子どもの感情に共感的理解を示し、「あなたの考えを大切にしている」というメッセージを言語非言語問わず日常的に伝えることが、存在そのものの肯定としての自己肯定感を維持したり、高めるといえる。学校現場では、教員が女子生徒の感情表現を評価ではなく理解の対象として受け止めることや、他者との比較でなく「自分なりの達成や努力」を重視したフィードバックを行うことが有効であると考えられる。

また、女性では「波風を立てない」関係が自己効力感の低下を招く可能性があるため、葛藤や意見の違いを避けるのではなく、保護者や教師が安心できる関係性の中で対話を通じて意見を述べるができる環境を整えることが、自己効力感の発達を支援するといえよう。

男性においては、家庭内の「規律」や「役割の明確さ」が、自己効力感や自尊心の形成に寄与していた。つまり、家庭では「自分が家族の一員として役に立っている」「任されている」という感覚が、行動的自信を支える基盤となると考えられる。したがって、親は過度な管理ではなく、信頼を前提とした任せるところは任せ姿勢や具体的な役割を意識することが重要だといえる。

学校においても、男子生徒が自ら考え行動する機会を与え、責任を持たせることが、自己効力感の育成につながると考えられる。教育課程の内外を問わず、自分で決めてやり遂げる経験を重視し、失敗を評価ではなく成長の機会として扱う支援が有効である。特に青年期の男性にとっては、挑戦や課題解決の体験が自己肯定感を高める重要な要因となるといえよう。

また、家庭での養育と学校での支援が連携できていない場合に、青年期の自己肯定感形成に混乱を生む可能性があることは容易に想像される。家庭が過干渉である場合には、学校が自立的経験を保障する方向で補完することが必要であり、逆に家庭が過度に放任的で

ある場合には、学校が情緒的な支えを与える役割を担うことが望ましいといえる。ありのままの存在を受け入れることと行動に対して適切な期待をかけることで、青年期の自己肯定感を最も強固に支えるという本研究の知見を踏まえた支援における原則は、対応が困難になってくる時期の今後の家庭支援と生徒支援の一助となると考えられる。

引用文献

- こども家庭庁. (2023). 我が国と諸外国のこどもと若者の意識に関する調査 (令和5年度).
- こども政策に関する調査研究事業. Retrieved October 15, 2025, from https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/d0d674d3-bf0a-4552-847c-e9af2c596d4e/3b48b9f7/20240620_policies_kodomo-research_02.pdf
- 姜信善, 砂川愛奈. 時間的展望を媒介とした青年期における自己肯定感が精神的健康に及ぼす影響: 親の受容的な養育態度および仲間からの被受容感に焦点をあてて. 2022. PhD Thesis. University of Toyama.
- 入江和夫, 岳田衣実, 古賀淳子, 藤村麻衣. 大学生の自己肯定感及び死生観に影響を与える親子関係. 山口大学教育学部研究論叢, 62, 7-17. 2013.
- 廣崎陽, 木俣さら. 大学生における家族との関係が自己肯定感に与える影響—家族の仲の良さ、及び養育者のネガティブ発言に着目して—. 名古屋芸術大学人間発達研究所年報, 13(2), 1-14. 2025.
- 高垣忠一郎. 私の心理臨床実践と「自己肯定感」. 立命館産業社会論集, 45, pp. 3-14. 2009.
- 郭芳, 田中弘美, 任セア, 史邁. 子どもの自己肯定感に及ぼす影響要因に関する実証研究: 京都子ども調査をもとに (Doctoral dissertation, Doshisha University). 2018.
- 久芳美恵子, 齊藤真沙美, 小林正幸. 小, 中, 高校生の自己肯定感に関する研究. 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, 42, 51-60. 2007.
- 内海緒香. 青年期養育尺度 (PAS) の作成. 心理学研究, 84(3), 238-246. 2013.
- 杭瀬智子, 三澤咲美. 日本における家族特性評価尺度の作成. 臨床死生学年報, 8, 30-49. 2003.
- 吉田美波. 親の「褒め」・「叱り」・「見守り」が子どもの内的作業モデル及び自尊心に与える影響について. 跡見学園女子大学附属心理教育相談所紀要, 18, 55-70. 2022.
- 野澤朋未, 浅井継悟. 児童の認知する養育者の身内卑下呈示と自己の強みへの注目との関連. 日本教育工学会論文誌, 47(1), 171-179. 2023.
- 藤川順子, 大本久美子. 高校生の自己受容・他者受容と親との関わりの関連. 大阪教育大学紀要 第IV部門 教育科学, 64(1), 81-92. 2015.
- 朝日志帆, 岡本吉生. 親子関係に対する子どもの認知と子の精神的強さとの関連. 日本女子大学大学院紀要. 家政学研究科・人間生活学研究科, 24, 227-234. 2018.
- 橋本博文, 前田楓. 親子間における自尊心の類似性. 日本教育心理学会総会発表論文集 第62回総会発表論文集, p. 242. 一般社団法人 日本教育心理学会. 2020.